

「汚いぞッ！ 女子供を罠に使うなど……ッ！
貴様ら恥を知れッ！」

彼女の名は「氷魔法使いの魔女」として、
人類支配を企む魔王軍と戦う高名な魔女のひとりだ。
そんな彼女は『魔女狩り』のために仕組まれた罠にかかり、
こうして魔王軍の捕虜となっていた。

「なんとも言え魔女め。そんなことより
お前自身の命の心配をしたらどうだ？
お前の態度次第では……、
生かしてやつてもいいぞ？」

「貴様ら、一体何が望みだッ！」

「まずはお前の態度とやらを示してもらおう。
そうだな……、お前のその孕み袋の
入り口を見せてもらおうか」

「クッ、こおんの、下種野郎どもめッ！」

（魔女としてなんたる屈辱ッ……！！
でもいいわ、どうせこの後全員魔法で氷漬けにしてやるんだから
せいぜい最期にアソコでも眺めて下種に笑って——）



ズルッ、ズルルルルルウッ！

「——ぎ、貴様何をしたッ!?」

あ、ああああアソコの中がア!
グチャグチャに、か、かき回されてえ——!

ズブッ、ズブズブズブッ!

「ど、どどんおく、奥にッ! 入ってくるッ!」



「敵ながら素晴らしい魔力の持ち主だ。
その素質、是非とも我が魔王軍の進撃に
活用させてもらおうではないか!」

「ぎ、貴様ああああ!」

こ、こんなことをしてええ、ただで——!

三三三

チンチンチンチンチンチン



「うん、魔力がズーッと上がる感じがする♡」

「おっ、おっ、おっ♡」

「まじか、ほんとに？」

も、もしかしてこれえ、

おなかの中のば、バケモノにいい♡
ま、魔力が……き、共鳴しているの……？

やめッ、これ以上はやめでえええッ♡

お、お胎があああッ！

ア、アヘエエエツ♡

は、破裂するうううッ！！！！！！」



いい顔だ、早くも触手の即効性媚毒ホルモンが効いてきたか。

我が魔王軍兵士の強靱化に欠かせない『強化用触手』を養殖する苗床
それが素晴らしい魔力に満ち満ちたお前のこれからの役目だッ!

「ああ、あひッ♡ ちゅ、ちゅ、ちゅ……」

「よしっ、最初に『養殖』した触手は全部放り出したな。
ホラッ、さつきみたいに態度示せよ態度ッ！
死にたくなければさっさとそのガバマンコ拡げて態度示セッ！」

「クッ！」

（こ、この外道野郎めッ、私が少し弱ったように見えるからといい気になって……ッ！
許さないわ、絶対にッ、絶対に隙を見つけて百倍返しに――）

「ハハハッ！ 流石の水魔法使いの魔女でも死ぬのは怖いのか！
死を恐れてのガバマンコ御開帳、これほど愉快なことはないッ！
だが、そう命に執着する様、嫌いじゃないぞ。よし、これだけガバれば――」

「ちゅ、ちゅ、ちゅ……♡
い、い、い、い、いッ♡」

「ほら、マンコ拡張器具も入れやすい。
逆にマン肉挟ってやらんと面白みに欠けるくらいだ！」



「よし、これで立派な閉じないガバマンコになったな、あとはコイツを——」

掌の中から取り出された鈍い銀色の光を放つピアスの口を開け、大きく広げられた淫裂へ近づけていく。

パチンッ！

「ぎゅるるるるるッ！」

パチンッ！

「ぎゅるるるるるッ！
き、貴様今度は何を——」



「なに、簡単なことだ。」

今そのガバマンコと勃起クリトリスに取り付けたこの私特製耐魔力封殺ピアスの力で、お前自慢の氷魔法、そのうちの攻撃魔法をまずは封印させてもらつたのさッ！
まあ、そんなものの事なんて、触手を孕んだ快楽で忘れてしまつていたようだがなッ！

「クッ……、クソオオオオ……！ このド変態外道めッ！」

「さあ、処置が済んだところでお前には強化用触手をしつかり孕んでもらおうかッ！」

うじゅる、うじゅるじゅるじゅるッ！

「や、やめえ……、あ、あひいいいいッ♡
ヤダッ！ 触手があ♡

さっきと、比べ物にならないくらい♡♡♡
アヘッ♡ い、イヤだッ！

触手にッ、腕がアッ♡ む、胸がアッ♡

あっ♡ あああっ♡ あ、アソコもお、腕もお、胸もお♡

し、触手の触れるところが♡
ぞ、ゾクゾクしてええ♡

「そうか、マソコもデカチチもゾクゾクしてきたか。

触手の分泌する即効性媚毒ホルモンによる快楽増幅効果と、
ピアスに付与した性感向上の効能が早速ダブルで効いてきたようだな。

『苗床』としての適性が予想以上だ。
実に素晴らしいッ！」



「君のその素晴らしい氷魔術のスキルを強化用触手に継承させるためには、とてもアナルだけでは器が足りないな。ほう、その大きな乳袋が、まだ空いていたなあ……ッ！」

何本もの触手がさらに放たれた。その触手のひとつの先端が、包皮のようにずりりと剥け、その中から現れた亀頭のような器官の先端から針が飛び出す。

うじゅるッ、うじゅるッ、うじゅるッ！

「やめッ♡ や、やめろッ！
もう、もうこれ以上何かされたらあ♡
私、わたしいいいいいい！
こんのッ♡ このッ♡ 触手ッ！
は、はなれ——」

——アスリッ♡

「ひぐううッ♡！ち、乳首にいい♡
な、何かがああああッ♡」

乳首に突き立てられた触手の針から注ぎ込まれる
触手を濡らす体液とは比べ物にならないほどの濃度の即効性の媚毒ホルモンが、
じわじわと乳腺の中へと浸透していく。

「おおッ♡ お、おっぱいのなか、中がああああッ♡
あつ、アツくてええ♡だ、ダメなのにい♡
おおッ♡ おっぱいでえ♡ い、イギそううううう♡」

「おおおおッ♡ おっぱいだけじゃないいいいいッ♡
お、お胎もッ！ダメッ……！
いや、イヤなのにいいいッ！ お胎もアツくてえええッ♡
な、何かが膨らんでえ♡ い、イギッ——」



「ひぐうつ♡?! おおおお♡
お胎があああ♡ ど、どんどんふくらんでええ♡
しょッ、触手どんどんふえていくうううッ♡
いい、イヤアッ!
イヤらのにいいいい♡」

「あああつ、アヘエエエエエツ♡♡
な、なにいまのツ♡
ニギッ、ギモヂイイツ♡!!
も、もしかしておおツ♡
おしりのなかにツ♡
触手うツ♡ は、はいってきてるツ♡!!」

「おおおッ♡ お胎もおおおッ♡
ち、腸のなかもおおおおッ♡
し、しよくしゅうッ♡
す、すぐふえてええええッ♡♡
も、もうはれつしゆるううううッ♡♡♡♡
「♡♡♡♡♡

「んげえええええええッ♡♡♡！」

「よし、この魔女を苗床として生かしておいたのは正解だったな。これまでに使った魔女の中で最も苗床の才能が高い。」

まさに苗床になるために産まれたようなものだッ！

頼むぞ苗床ツ！
世界侵略という

我が魔王の悲願を叶える我が軍の強さは、お前が放り出した触手を喰らったの強化にかかっているのだからなッ！」

最初に触手を孕まされてから
もう何度目になるだろうか。
『養殖』の儀式の時間を迎え
Princessは前もって挿入されていた器具によって
強引に拡げられたマンコに手を添え
こちらを振り向き見上げる。

(ああ、はやく挿れてツ♡
触手を……ツ♡)

ハッ!?

ダメ、ダメ、ダメよ今のままじゃ、
今のままじゃ私は——!
負けちゃダメツ!
負けちゃ……ツ! でも——

「く、悔しいけどツ、

しよ、触手で弄られまくってえツ♡
お、おっぱいが大きくなればなるほどおツ♡
は、孕みたくなくて仕方がないわツ♡

お、おねがいします……ツ♡
は、早く触手をぶち込んでちょうだいツ♡」

「ハハハッ！
最初にこの部屋の床に転がした時からすれば
ずいぶん変わったじゃないかッ！
しかし、これはこちらにとつては好都合。
さあ、お前の望みどおりに
日もしつかりと孕ませてやろうッ！」

ズルッ、ズルズルズルッ！

湿り気を帯びた蠕動音が響き渡り、
最初の頃とは比べ物にならないほどに
広がったマンコの中へ、
触手がズルズルと大量に殺到していく。

「ああああんッ♡♡

し、触手が以前よりも、
は、入りやすくなつてえええええッ♡

だ、ダメなの♡
し、触手でズボズボされるの♡

んぎもちいい♡♡

「よし、とりあえず胎の中の触手は二通り全部放り出したな。
ん、なんだその物欲しげな目は？
もつと孕ませろつてか？
よしわかった。その前にまずは……」

そこで以前取り付けた
耐魔力封殺ピアスのうち、
クリトリスに取り付けていた
ものを取り外すと、
手にしていたより大きな
別のピアスを取り付けた。

パチンツ。

「んあひいいいいッ♡
な、なにこれ……？
い、痛いはずなのに……♡」

バッチンツ！

「んひいいいいッ♡
痛いはずなのに……♡
ぎ、ギモヂイイイイッ♡

んひ♡？」

ぶるんツ！

ムクムクムクッ！

「あひいいいいッ♡♡♡♡
な、なにいまのおおお♡
く、クリトリスがはじけてえええ♡
ゆ、床に擦れてえええ♡
な、なにこのギモチよやああああ♡」



「よし、ちゃんとピアスの魔法通りにクリチンポ化したな。
すごいな、クリトリスの包皮つてこんなにだらしなく伸びるのかッ！
さあ、クリチンポだけでアへつている場合じゃないぞッ！
早速いつものように孕んでもらおうか！」

フルッ、フルフルフルフルッ！

「んひい い い い い い い い い い ツ♡♡♡♡♡」
らめええええええええええツ♡♡

しも、触手様が入ってくるだけでもおおおおッ♡
や、やばいのにiiiiiiiiッ♡

くりいッ♡

クリチーポが床に触れるだけでええええええツ♡
も、もう、どっちもぎもちいいいいいいッ♡♡♡

「もう無理いいいいいいいいッ♡♡♡♡♡
きもちいいいいいいいいッ♡♡♡♡♡
きもちいいいいいいいいッ♡♡♡♡♡

もう、

もうわたしッ、

触手様のツ、

触手様の専用孕み袋でいいいいッ♡」

この瞬間、
誇り高き氷の魔女の心は
完全に快楽に堕ちたのだった。

「もっどおおおおおッ♡♡♡
もっどぎもぢいいいいちようらいいいッ♡
あああいいいいいいッ♡♡♡
ぎ、ぎもぢいいいいいどんくるうううッ♡
あああッ♡
し、触手様がくちにあがってえ——、
ん、んげえええええッ♡♡♡！」
彼女の言葉を遮り、
食道を駆け上がった触手が口を押し広げ、
あふれ出していく。

次々と孕む触手を覆う粘液が放つ
即効性の媚毒ホルモンが体内にどんどん送り込まれ、
これまで以上に全身を走る快楽によって
媚毒の効果が促進され、
さらに快楽を身体に与えるループに陥っていく。

(あああッ♡♡♡
ぎもぢいいいいッ♡♡♡
触手様のママになるの本当にきもぢいいいいッ♡
もう、もうわたし戻れないッ♡
もう触手様のママやめられないいいいいッ♡♡♡♡)

「それにしてもなんとという苗床の素質の持ち主だ、予想をはるかに上回る勢いで触手が育っていく。」

しかし……、

「どんどんと繁殖していくのはありがたいが、あまりに早く苗床から零れ落ちてしまうと触手の育ちに悪いな」

(ぎもちいいいいッ♡♡♡
マンコで、お腹で、触手様を孕んでぎもちいいいいッ♡
もつと、もつとぎもちいいいいをちようらいッ♡♡♡
ぎもちいいいいのためなら、
そのためならなんだってするわッ♡
だから、おねがiiiiiiiiッ♡♡♡)

「なんだ、その物欲しそうな卑しいその目はッ！
もつと身体をいじり倒して欲しいってかッ！
そうか、ならいいだろう、
お前の苗床としての望み、
叶えてやろうッ！」



「ひとまず触手が零れ落ちないように、
そのアナルを拡張して袋のようにしてやろうッ！」

触手使役魔術によって操られた触手が蠢き、
直後ムクムクとアナルが肥大化し、
まるで筒のような形に変貌を遂げ、
ぞろぞろとその尻穴からあふれ出していく。

「——ただ肛門を肥大化させるだけじゃダメだな、
それなら——」

命じられた触手の力で脱肛したアナルの形が変化を遂げ、
背中縛られる形となった腕を通す穴が開き、
そこでその巨大化したアナルが固定される。

「よし、これでアナルで増えた触手も
少しは長く苗床で育てられる。
実に醜くて、実に面白い姿だッ！」



「よし、マンコもアナルもすつからかんだな。孕んでいた分の触手はすべて放り出せたな。いいか苗床ッ！
その苗床特化ド変態ボディから一匹たりとも零さず、大切な触手のママとしてこれからもしつかりその身体で育てるのだぞッ！」

「はいいいいいッ♡
わたし、

触手様のママとして
精いっぱいこの苗床に特化した
ド変態な身体で、
たくさん立派に
触手様を孕ませていきますうう

（当初は中々心が折れず少々やきもきしたが、これで完全に身も心も我が魔王軍側に堕ちたな。これで我が魔王様の世界征服計画も、そして魔王軍強化担当としての私の未来も――！）



「ほら見てええええッ♡
私のマンコこんなに穴からはみ出ちゃってええええええッ♡
アナルの孕み袋みたいに足で広げればあ♡
ほらあ、
もーっとたくさん触手様を
孕んでられるわああッ♡」

クリチンポ化改造による快楽人格破壊の後も
幾度となく触手を孕まされ続け、
その度に触手が苗床から零れ落ちないよう
魔術による人体改造がエスカレートしていく。

その結果脱肛拡張だけでは飽き足らず、
とうとう子宮までもが拡張されてしまい、
アナルとマンコ双方から
巨大な赤黒いものが飛び出す有様となっていた。

「おねがあああッ♡
今日も早く私の
このクソデカ子宮脱マンコとおおおおッ♡
脱肛孕み袋の中に触手様をぶち込んでえええッ♡
今日もお、
気が狂うまで孕ませてえええええッ♡」



（この様子だと、この苗床もそう長くはないかもしれないな。よし、それならいつそ――）
手にしていた無数の魔力継承能力増幅の効果を与えるピアスのひとつを手に取り、
子宮へ、アナルへ、胸へ、いくつもつけていく。

バチニッ！

「んひひひひひ♡」

バチニッ！

「あひひひひひ♡」

バチニッ！

「ぎもぢいいいい♡」

ピアスつけてもらうのぎもぢいいいい♡」

「さあ、お前の苗床としての能力を
極限まで引き上げてやったぞッ！

さあ、

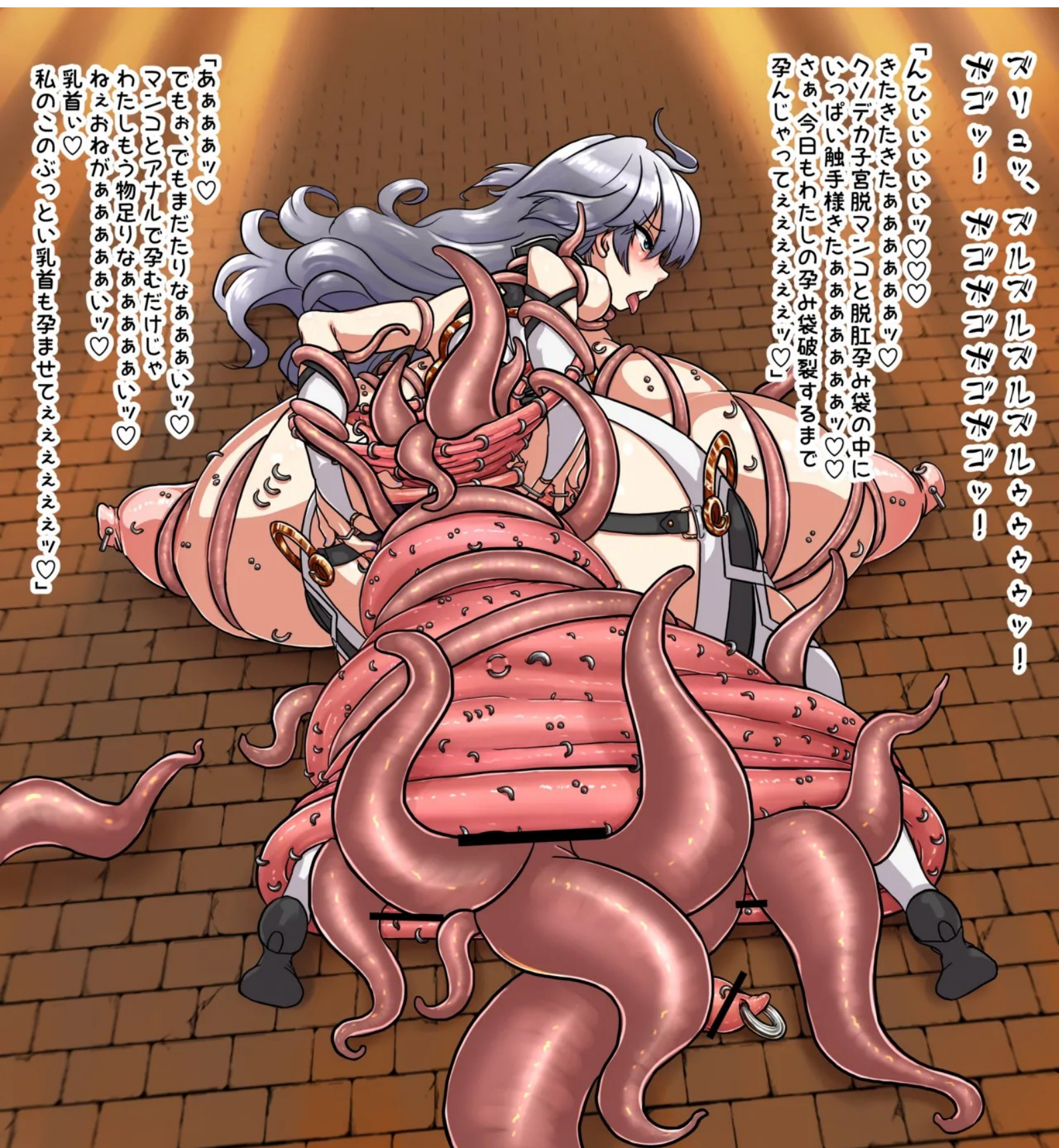
お前の身体の孕める場所すべてで
孕んでみせるッ！」



ズリュッ、ズルズルズルズルウウウッ！
ポゴッ！ポゴポゴポゴポゴッ！

「んひひひひひッ♡♡♡
きたきたきたああああッ♡
クソデカ子宮脱マンコと脱肛孕み袋の中に
いっぱい触手様きたああああッ♡♡
さあ、今日もわたしの孕み袋破裂するまで
孕んじやってえええええッ♡」

「ああああッ♡
でもお、でもまだたりなあああッ♡
マンコとアナルで孕むだけじゃ
わたしもう物足りなあああッ♡
ねえおねがああああッ♡
乳首い♡
私のこのぶっとい乳首も孕ませてええええッ♡」



「ん、んげええええええッ♡♡!」

アナルで無限に生まれ続ける触手が行き場を求め、
今日も彼女の口を強引に押し広げ、チビチと暴れながら姿を現す。
その身体の大半を腕より太い触手が取り巻き、醜く変形した身体は
ひと目では人間とは認められない有様だった。

「きもちいいッ♡」

身体中がうねうねいっっぱいできもちいいッ♡♡♡

おねがい♡♡♡

おねがいわたしのいい触手ちゃんたち♡♡

この「ママ」の穴という穴をお♡

そのたくましい御体でええええええッ♡

孕ませ尽くしてええええええッ♡♡

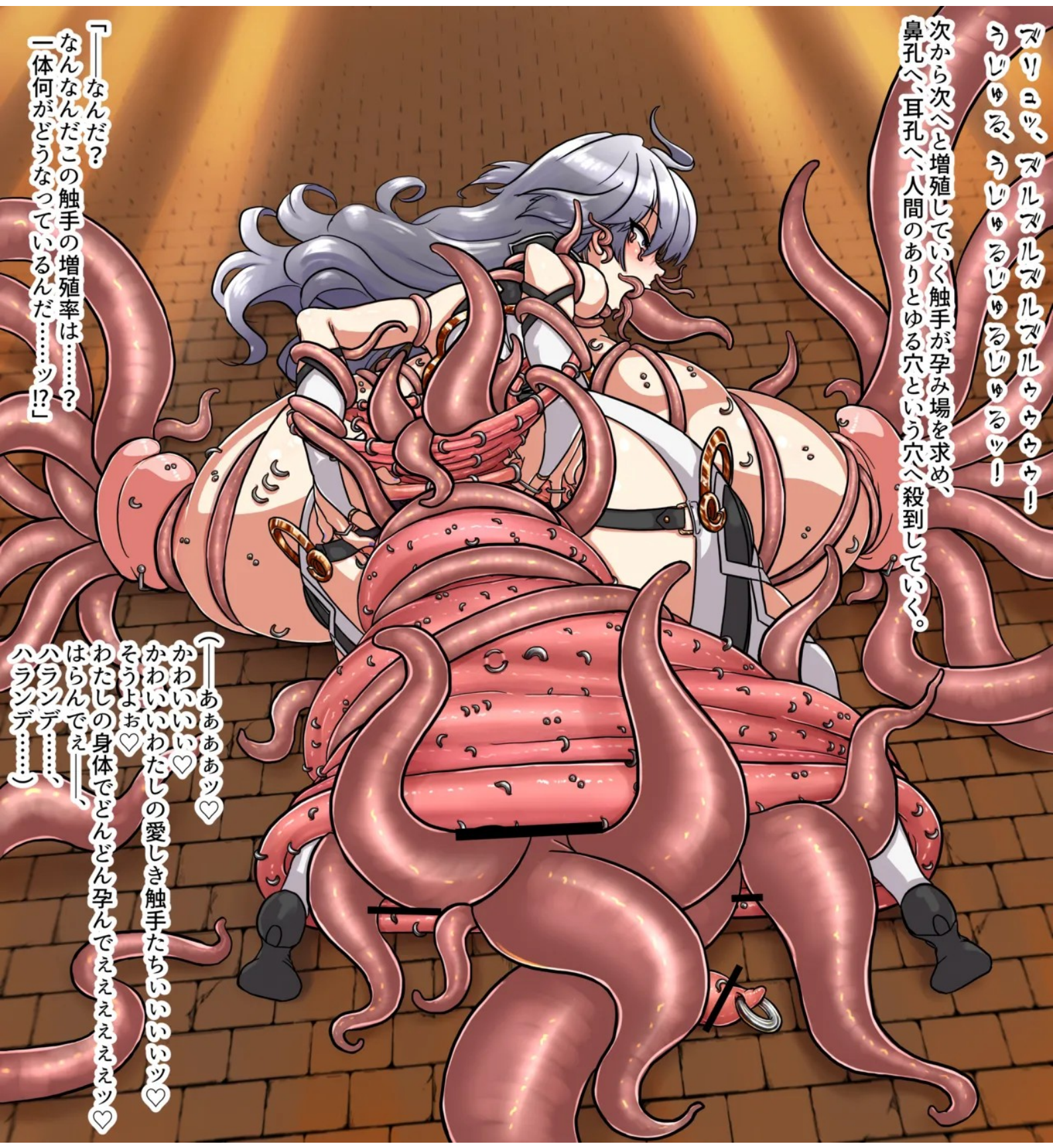


ズリユツ、ズルズルズルズルウウウー！
うじゅる、うじゅるじゅるじゅるッ！

次から次へと増殖していく触手が孕み場を求め、
鼻孔へ、耳孔へ、人間のありとゆる穴という穴へ殺到していく。

「なんだ？
なんなんだこの触手の増殖率は……？
一体何がどうなっているんだ……ッ!?」

「ああああッ♡
かわいい♡
かわいいわたしの愛しき触手たちいい♡
そうよ♡
わたしの身体でどんどん孕んでええええ♡
はらんで♡
ハラッデ……♡
ハラッデ……♡
ハラッデ……♡」



「ハラン……」
ハラン……
イヤ、ハラン……
ハラン……
ワタシ、ワタシ……
ワタシ……
ハラン……

「ハラム……」
 ママッ、キモ♀イイイイ♡
 ママギモ♀イイイイ、
 コロコッ！
 ママギモ♀イイイイ♡
 叶エルッ……！
 モット、モット孕ムッ！
 モット孕ンデッ！
 ママギモ♀イイイイ叶エルッ！」

「なんだ、なんなんだ今の声は!!
こいつの口はふさがれてしゃべるなんて
まさか、
触手が苗床の魔術スキルだけでなくて……、
こいつの意識、

いや……

「自我まで吸い取ろうとしている……!?」

「このままではまずいッ！
早く早くこの苗床を止めなければ……ッ！
やむを得ない、
もう『あの術』を使うしかない……ッ！」

ピキッ。ビキビキビキビキッ！

ピアスが魔術命令を受け止めることで
発揮された石化の効果によって、
歪な『進化』を遂げた身体が、
次々と石となって固まっていく。

「モット、モット孕ムッ！
モット、孕ンデッ！
マッ……
ギモグイイイ……叶エ」



ビチッ、ビチビチビチッ！
ビチビチッ、ビチッ……！！

「ようやく触手の動きが止まったか。
魔術レベルの高い苗床が
快楽を無制限に貪るようになると恐ろしい。
まさか自我まで触手に移そうとするとは……、
これは初めての事例だな」

力を失った触手の二部が
力なくだらりと垂れ下がり、
触手に覆われていた相貌が姿を現した。
完全に石化したその相貌は虚空を見つめたまま、
微動だにすることはなかった。

「さて、
この苗床と暴走した触手の処分を済ませたら、
早いところ新しい苗床を見つけなければならないな。
魔術強化用触手の大量生産は魔王様のご意向、
一刻も早く、
兵士に新たな苗床の捕獲を指示することしよう」























































